○中国四国の国語研究界

よい意味の地方性を発揮するものとして、「中国及四国」という活動単位が確立されてよいと思うが、現状は、そこまでいっていない。中国四国地方の学界という内面的なつながりは、まだできていないのが現実である。

このことは、何とかしなくてはならないと、方々で思われているのではないか。先には岡山に、岡山国文学会が生れた。ついで広島に、広島国語国文学会が生れた。広島の発会の時は、行く行く中国四国の連絡をはかって、両地交互に、年会も開くことができればと考えたのである。ほかの所にも、やはりその大学を中心に、学会や研究会が設立されようとしているであろう。愛媛のは、国語教育を根幹とする、広いつながりの「愛媛国語研究会」である。

学会組織は別としても、諸方の大学に、それぞれの機関誌が発刊され、香川・愛媛・山口・広島その他のものに、国語関係の論文を見ることができる。山口県では、小野田高等学校で、研究論叢が発行され、中に「防長植物方言覚書」（小川五郎校長）なども見えている。高校方面の活動も、諸地方で、いろいろの形をとりつつあることと思われる。

愛媛国語教育研究会は、年をおうて活動を拡充し、この春は、松山に「全国国語教育研究大会」をむかえた。会誌「国語研究」第七号は、その大会の「特集」としている。広島国語国文学会も、松山の大会の直前に、西尾実先生の国語教育講演会を、三、四地で開催した。会誌は「ことば」という会報を出すのにとどまっている。

岡山市には、ミシガン大学の日本研究所があり、その実態調査のしごとには、ことばへの注意も含まれているようである。岡山を中心とする瀬戸内海文化研究会は、それに協力しつつ活動するものであろう。

個人関係のことに及べば、国立国語研究所の地方調査を委託された人々は、それぞれの地方で活動していられる。高知の土居重俊氏、松江の広戸惇氏をはじめとして、おのおのの方に御発表がある。

愛媛大学紀要「人文科学」一ノ一には武智雅一氏の「万葉語の研究—大伴家持の用語を中心として—」その他が見えている。

土井忠生先生は、目下スペインで御研究中であるが、「ロドリゲスの自筆物に親しむ」などして、新開拓に邁進していられる。お所をここに書きそえることをゆるされたい。

Sr. Don Tadao Doi Residencia del Consejo Superior de Investigaciones Cientificas Pinar 21, Madrid.

中国及四国の同学の方々が、活動の提携と研究の協同とにつよくお心をよせてくださることを願望して、この一人の報告を了る。（二十六年九月一日　藤原与一）